【土木計画学研究・論文集 No.8 1990年11月 招待論文】

東北文化の歴史的風土性

The Historical and Regional Foundation of the Culture in the North-Eastern Region of Japan

新 野 直 吉*

By Naoyoshi NIINO

東北文化に関して，印象深い出来事が数年前にあった。関西の著名な財界人が「東北は，熊襲の住地で文化も低く，人口も少なく価値の乏しいところだ」という発言をして物議を醸したのである。東北人にとっては不愉快な話なので然るべき反応が東北各県で示された。東北人でないにしても，近代人のエチケットとして失礼な言い分であることも確かなことなので，結局発言者の謝罪でこの件はケリがつくことになる。

だが少し立ち入って言えば，東北が人口は少なく，文化的な施設や活動が首都圏や京阪神に比べて貧弱であることは確かである。綜合的視野から東北の価値をどう判定するかは観方によって異なるであろうが，一般論として関西の方が上であることは一致する見解であろう。だから訂正すべきは，「熊襲」という西九州古代住民名を挙げたことを「蝦夷」という古代東北住民を誤ったものであるという点だけであるというのが私の見解である。

実は昭和53年のことであったが，私は『古代東北史の人々』という本を書いた。その中には，延暦年間，今の岩手県水沢・江刺地方に当たるところに大勢力圏をもっていたアテルイという蝦夷の大族長が，征東将軍紀古佐美の数万の大軍に対した延暦8年(789)の戦いでは大勝利をおさめる地力を有しながらも，延暦21年(802)の胆沢城の構築を見ると，征夷大将軍坂上田村麻呂とは講和をし，彼と共に上洛して，今風に言えば調印をしようとしたのに，田村麻呂のように現地への確かな認識を持たない公卿達の蝦夷に対する懼れから，アテルイ等は斬首されてしまうことを述べて，彼らの無念の情を想い，現地勢の政府に対する不信感の凝結状況を論じた項があった。関西の大都市の消印のある読者の投書が届いた。「朝敵蝦夷の子孫！田舎者は大嫌いだ」という若い文字で書かれた文章が躍っていた。東北は田舎で，田舎者は悪だという通念が都会の人の間にあるのであろう。

現代だけのことではない。近代の夜明けの明治時代に「白河以北一山百文」という語が既にあったのである。いうまでもなく戊辰役において西南雄藩の主導によって形成された維新政局に対応し得なかったのみでなく，奥羽越三十一藩同盟などをつくって会津戦争に集約されるような大敗を喫したのであるから，勝った権力中枢やその周辺の側から見れば，このような雑言も大した深刻さもなく形成されたものであろう。古代においては，神話伝承時代の蝦夷・熊襲から，律令時代の蝦夷・隼人に至るまで，北方と南方の辺民として扱われていたもののうち，維新によって薩摩隼人は最高の栄光を得，東北の人々

は底辺を離れることがないように見えたのである。本当は戊辰役の窮極の賊拠点の如く遇せられた会津からさえ，山川健次郎・大山捨松兄妹を初め多くの新時代の輝ける星が輩出しているのである。にもかかわらずこのような見方が定着していたのである。

もう少し関連したことに踏みこんでみると，第二次大戦からその終末という絶対的窮迫期に，最も薩長の先頭性が強い軍閥とか軍人社会というような処でさえも，東條英機・石原莞爾・板垣征四郎・畑俊志・及川古志郎・山本五十六・井上成美・米内光政・小磯国昭などの奥羽越出身者が直ぐに思い浮び，斎藤実や相沢三郎のような二・二六事件の印象的な人物の名も出てくる。むしろ終戦近くには東北人が此の分野でも活躍していたともいえる。もちろん世間にも東北自体にもそういう認識はないであろう。

東北が劣っているとする考え方は何も幕末以後に生じたのではない。天明8年(1788)11代将軍徳川家斉の就任によって派遣された幕府の巡見使に随行した地理学者の古川古松軒が『東遊雑記』を著している。彼は特別の少数箇所を除いて極めて強い東北劣悪論を展開し，「会津侯は23万石の御大家ながら，城下甚だ佗しく賤しきなり。岡山の城下などに見くらぶれば大いに劣れり。婦人の容体ことにいやし」「三春城主秋田信濃守，山分ゆえ市中見苦し」に初まり，「上山は松平山城守，市中皆々草葺・板屋根にて，見苦しき町の中に温泉あり」「山形に出ず。平城にて街道より僅に見ゆるばかりなり。今は大いに衰え，町家皆々草葺のみにて，端々の民家は非人小屋見る如き佗しき市中なり」「久保田は佐竹侯の大城地にて20万5800石余，羽州6郡の大守なり。知行所広大なるに如何にしてか貧弱なると風聞あることなり。上方筋の城下とちがいて見ぐるし」「風土においては秋田・津軽大いによし。しかるに貧家数多にて，家居・衣服のあしきことは，この辺大いにあしく」と言い「盛岡は南部侯の城下にて，聞きしよりはよき所」と言いながらも「日向国へ下りし時に，辺鄙の下国なるに驚きしことながら，人物は愚鈍にはなかりしに，この南部にては，下々の人々は賤しきのみにあらずして案外に愚なり」と記し「忍びて立ち出で仙台城下諸士の屋敷屋敷を見巡りしに，城下は定めて宜しき構えなるべしと思いの外，草葺きの小家多くて，甚だ佗しき市中なり」と評記するのである。

草屋根や板屋根が多いのは，積雪寒冷地に瓦屋根が弱いことにもよるのであるが，実際問題として佗しく見えたであろう。言葉の問題もあるし東北人の引込思案や人見知り的謙遜性から寡黙である性格を古松軒は認めず，雄弁は銀沈黙は金ということも思わなかったのであろう。都会に比べ華美でないのはその通りであるから，それを「悪しきこと」にするのも一つの見方かもしれない。しかし東北人が愚鈍であったのではない。この前後平田篤胤・佐藤信淵・林子平・大槻玄沢・最上徳内などの活躍があったのである。彼よりも前に安藤昌益の存在が既にあったのであり，この後にも高野長英のような人物も輩出するのである。積極的な東北人はその才能を十分に表に示している。

実は東北愚鈍論は江戸時代に生じ定着したものではない。16世紀後期のことである。出羽の山北に前田氏という戦国小名がおり，五十棲六十郎という上方浪人の軍者が寄寓していた。『奥羽永慶軍記』によるとその彼はまだ若い主人の又太郎に

> 奥羽両州は人の心愚かにして，威強き者にも随う事を知らず。彼は先祖の敵なるぞ，是は賤しき者なるぞ，時の武運能くして威勢にほこることにこそあれなどとて随わず。あまつさえ1万2万の敵に僅かに5百3百の勢を以て盾突き，終に討亡されて永く家を断絶する族多し。されば武威盛なる大将も随うもの少なければ身を立てがたし。これ東夷の愚鈍なるが故なり。

と諫言したのである。にもかかわらず前田氏は由利十二頭というより大きな勢力と戦って滅び，秀吉のいわゆる太閤検地を迎えるまで，その反骨のため家の命脈を保つことができなかった。

五十棲が「東夷の愚鈍」と指摘した亡びゆく意気地を示した存在に，九戸政実とその同調勢力があり，彼らは東北の心情の凝り固まりぶりを誇るかの如くであった。この悲劇的頑固さと意地張とは太宰の名作『津軽』のなかにもとり上げられるところであるが，反抗の直接的動機は南部信直に対する反感であったというが，現実が豊臣秀次を総大将とする東北の諸武将の軍も含む6万の大軍を相手に5千の兵力で戦うことになるとき，利を以て処世する人々の常識では考えられないこの決戦であった。まさに奥羽的

反骨の発露である。

利もまた理を裏打ちにして成り立つものであるが，政治の理においても，秀吉が小田原攻略に成功した直後に，「かんとうひのもと」まで，従わないものは「1郷も2郷も悉くなでぎり」にしても断行せよと命じた，奥羽仕置の実相を把握できなかったとすれば愚かなことであり，知りながらも「盾突」いたとするならばまさしく五十棲の言の如くである。ここで「ひのもと」といわれるのは「日ノ本」で東北のことである。東北を示す古代の語の「日高見」というのと同じ概念である。古代中国の史書『旧唐書』では「日本国は倭国の別種で，日出ずるところに近く位置している」旨を記している。

古代において東北北部には『旧唐書』が別国としているような蝦夷国とされる領域があった。そして実は，西日本人には「愚鈍」とみえたこの反骨のこころは古代から存在したのである。それに私が気がついたのは昭和34年の『多賀城と秋田城』という本を書いた際であった。そこでは，

> 陸奥・出羽の歴史は，新来の勢力によってすべてを払拭される形で，全く別のものを植えつけられたのではなかった。政治的には中央政権のめざす形に敢えて改められたのであるが，文化的には在来のものをすべて否定され切ったわけではない。精神的な部面でのことは，なかなか根強く残存したのである。このような実情は，古きものへの郷愁を，いつまでも具体的な拠りどころを与えて残し，それと同時に新しきものへの異質観をいつまでも失わせないこととなってしまう。伝統に対する執着と，新しいものに対する憧憬及び反感とが，同時に強く刻みつけられて残った。千数百年たった今に，なお極めて強い東北の性格というものを，すっきりとはあらためられないのである。そのため長い間，静かではあるが暗く，素朴ではあるが頑固で，忍耐づよいが鈍重であるという，精神生活の中に呼吸しつづけて来たのである。

という趣旨の論述をしたのであったが，こういう東北のこころによってもたらされるとするならば，東北の文化にはおしなべてこのような性格が反映し伴われていることになる筈であろう。

ところで，その後東北史の研究をしているうちに，これは単に受身のこととして生じたのではないということを知るようになったのである。我々の若い頃には，弥生文化は宮城・山形以南にしかないとされていた。昭和30年代以後多くの弥生文化遺跡・遺物が岩手・秋田以北においても発見されるようになり，津軽の砂沢・秋田の地蔵田などでは前期のものまで発見されるに至った。しかしながらそこには，私が『斑状文化』と名づけている弥生と続縄文との両文化が混在している状況があったのである。

たとえば『六国史』では，景行天皇40年紀の「山に登ること飛禽の如く，草を行くこと走る獣の如し」という蝦夷の行動に関する表現があり，斉明天皇4年紀の「性，肉を食う故に持てり」と自分達の弓矢携行を弁明した蝦夷の族長恩荷の肉食すなわち狩猟漁撈の生活を語る史文があり，延暦18年紀の「山夷」という平安時代になってからも非農耕民がいたことを示す語が行われている。9世紀になってさえ承和4年紀の「弓馬の戦闘は夷獠の生習にして，平民の十もその一に敵すること能わず」と騎馬狩猟民的生活慣習の状況を述べ，さらに貞観11年紀の「夷俘は諸国に分居するも，常に遊猟を事とす」と，内国に移住させられ農民化を進められながらも，農耕を嫌い狩猟民としての生習を捨てようとしない夷俘や俘囚の存在が描写されるような史料・史文が続いているのである。

弥生時代どころか古墳時代以後になっても，かく根強く東北地方の住民について非農耕性が伝統として存続していたことは明らかであるが，一方においては「田夷」と称され農耕民化が進み，一般の班田農民と同じ段階に進んだ人々もいたのであるから，蝦夷といわれた人々が農耕を営まなかったのは，能力の問題ではなく好みと選択の問題である。なお本来持っていたその狩猟・漁撈・採取の生活を主として営み，水田稲作農耕生活地域が東北地方にも増大し定着度を高めて来る趨勢の中で，依然北方アジア的生活を継続し得たのは，その北方アジア大陸から，「北の海みち」による反骨を支える刺戟の更新があり続けたからでもある。

粛慎－靺鞨－渤海と，北方からの交流が東北の日本海側に絶え間なく続いていたのである。渤海国の200年三十数回に亘る来航は，神亀4年(727)の第1回も天平11年(739)の第2回も共に出羽の範囲に着

くのである。第1回目は蝦夷の境域に初め着いたため攻撃を受け，使節団は長寧遠将軍高仁義以下24人だったのが，16人は殺害され首領高斉徳ら8人のみが死を免れ日本の官側に接触できたのである。第2回は渤海使の船1隻が転覆し大使の胥要徳ら40人が水死し副使の己珎蒙が首領で，天平5年の遣唐使の1員で帰途漂流などで帰国の遅れていた平群広成も同伴していた。水難に遭っても出羽に着いたのである。出羽に「北の海みち」が伝統的に通じていたことを物語る。蝦夷は従来持っていた仲介交易の利を失うことになるため渤海と日本の直接の国家間交易を嫌い，既得権益の侵害と受けとって攻撃したのかもしれない。何れにしても遣唐使の「西の海みち」で問題が生ずると渤海経由「北の海みち」が代わりの通路となるという現実が存在したのである。

障碍が起こらぬ場合には，宝亀2年(771)の青綬大夫壱万福を長とする渤海使が船17隻 325人で野代（現在の能代）湊に来航したような形で来日することになる。このような官の交流だけではなく，民間交流も行われていた。天平18年(746)には渤海人と鉄利人1100人が帰化を求めて来航出羽に暫時置かれている。鉄利も渤海と同じツングース系の北方アジア人の部族である。宝亀10年(779)にも同じく両族359 人が帰化を求めて出羽国にやってきたことがある。このように纏まった数での来航でない限り，公的記録など残らないのであるから，私的なグループや個人の来航は無数であったに違いない。だから平安時代になっても，渤海使はやはり出羽海岸に着いた。延暦5年(786)に大使李元泰以下65人が船1隻に乗って出羽に着いた。12人は侵略され41人でやって来た。同14年(795)にも呂定琳ら68人が出羽にやって来た。劫略されて人物の散亡したものもあった。略奪されても殺されても出羽に着くのは対岸から自然な「北の海みち」が通じていたからである。野代湊についた時にはトラブルは無かったようであるから，港津に官か公の出先機関などがあって，受付けできたものであろうし，他の地域でも，略奪などしながらも，国書を持つ使者が国側に着いて，それを奉呈できるように計らうだけの関係を，蝦夷は，国家に対して持っていたものと見える。

養老4年(720)に渡嶋津軽津司という従七位上諸君鞍男以下6名が靺鞨国に派遣された。北海道から津軽方面の海域を受け持つ港津業務を担当する役署があり，正式に位階を帯びた役人が中央から派遣されて来ていたうえに，彼らが靺鞨に民情・市場の視察に渡海したというのであるから，このルートは国家的に重視されていたことがわかる。附言すれば天平5年(733)庄内から一挙に 100キロも北進して秋田村高清水の岡に建てられた秋田出羽柵は，このような対外折衝の役割も担っていたものと考えられる。この柵はやがて秋田城と呼称するようになる。出羽柵（秋田城）の直接上級の地方機関は多賀城の陸奥出羽按察使の府であるが，その多賀城には天平宝字6年(762)建碑した「多賀城碑」と呼ばれる碑がありその文中に，城の位置関係を示すべく，京まで1500里・蝦夷国まで 120里・常陸国まで 412里・下野国まで 274里・靺鞨国まで3000里，という記載がなされていて，靺鞨が東北地方を視野におさめた国家行政上如何に重要な国であったかを物語っている。靺鞨族が渤海国を樹てたことは周知の通りである。

靺鞨に先立つ粛慎は，『六国史』では欽明天皇5年紀の「佐渡嶋北御名部の碕岸に粛慎人有り」というところから名を表わすので，6世紀から日本海側には関係していたことがわかるが，頻繁に史上に出て来るのは大化改新以後である。彼の有名な阿倍比羅夫の北航も，越国守としての立場の行政拡充・水軍提督としての艦隊演習とならんで粛慎との交易ルートの確立という目的があったらしい。多分蝦夷を媒介としていたのを直結交易にしたかったのであろう。その後の国際関係の展開の中で彼の北航は斉明天皇4年(658)から3年間だけで断たれてしまったけれども，飛鳥浄御原朝に国家との公的な立場でも相当の接触のあったことがわかる。

多分此の頃伝わったであろうと考えられる遺物が，現在確認されている最北の古墳群の一つである八戸市根城丹後平古墳群から発見された。昭和62年(1987)のことである。数十基の古墳の中で15号円墳が調査され，その周溝部から青銅製の獅噛細工のある鐶頭大刀の把頭が発見されたのである。この辺の古墳からも多く発見され東北北部でもよく発見される蕨手刀などは奥羽系のものであるが，鐶頭大刀は南西から東北に伝わったもので，獅噛鐶頭は従来福島県ぐらいまでしか出土例は確認されていなかったので，

多くの人々は不思議に思った。中間が空白だからである。でも6世紀に新羅に発したという獅嚙鐶頭大刀が「北の海みち」で津軽にでも伝わったのであればこの出土は至って自然である。

文献史料でもなく埋蔵出土資料でもないものでも「北の海みち」を示すものがある。馬と犬である。北方アジア人の来航や交流があったのであるから，親密な家畜も伴われたとしても少しも不思議はないことであるが，実は私の辿ったのは逆の道筋であった。何故古代東北に必ずしも数の多くない名馬がいたのだろうかという疑問を追究して行くと，東北にソウゼンという北方馬神が祀られていることを知り，北方騎馬民族が多分筏で日本在来馬（道産子・吐噶喇馬・与那国馬など）と異なる大型馬を将来したことがわかったのである。犬も『延喜式』で独犴と記される北方犬で，血液形などから北海道犬や秋田犬の祖であるらしい。そして，その逞しい北方性は平泉藤原氏の頃に衰退するのである。古代文献資料のない原始時代においても，日本海の対岸からの海みちは東北の海岸に到達していたのである。シベリア青銅刀を模したと考えられている縄文時代の「内反りの石刀」という石製模造品があり，同類の青竜刀石器やその祖型である中期の鉄砲形石器などがあるし，同じ頃に伝来した鳥海山麓発見の殷時代の利器内反り青銅刀子などもそれを物語っている。十和田湖に近い鹿角市風張台地の美しく大きいストンサークル「太陽環状列石」も後期の北方性を帯びた遺跡である。また早期に仙台湾で始めて用いられたらしい「燕尾形ハナレ銛」と呼ばれる銛頭は，三陸沿岸から北海道・千島・アレウト・アラスカさらには北米大陸太平洋岸にまで広く伝わっているのである。一方的交流はないから，北方から東北への文化戟戦も当然あった筈である。

縄文時代は中期をピークに人口が減ったといわれている。ところが東北だけは減りながらも晩期の日本人口の半ば以上を擁し，万丈の気を吐いていたのである。縄文晩期の東北文化は亀ヶ岡式文化と呼ばれている。津軽木造町亀ヶ岡から江戸時代に土器が発見され，近代考古学でもこの形式の土器を「亀ヶ岡式土器」と呼び，この土器を伴う文化を亀ヶ岡式文化というのであるが，東北考古学の泰斗伊東信雄博士は「亀ヶ岡式文化」という論説の中で，

> 日本の歴史において文化はつねに南から北に流れていたが，北から南に流れたことはほとんどなかった。東北はいつも西南日本の文化を受け入れる後進地帯であった。ところが縄文時代の晩期には東北は先進地でその文化が西南に流れて，関西の文化にまで影響をおよぼしたのであった。

と述べたが，この文化を北部東北で発達させたことの最大因は，まぎれもなく「北の海みち」による海外文化の来入戟戦によるものと考えられる。しかしこの外来文化も無人の野に一方的に来入したのではなく，そこに住んでいた人々に受け容れられたのである。受け容れる力を持った人々はそれ以前から東北に住んでいたのである。少なくとも中期以降の縄文文化時代に東北地方は一つの中心地帯的位置を占めていたのである。この下地の上に縄文文化最先進地としての地位を，亀ヶ岡式土器文化は晩期の日本列島に占めることになったのである。

本来日本列島はアジア大陸に接続しており日本海は湖状であった。洪積世後期に朝鮮・対馬海峡が切れ，日本海の温暖化が招かれ，暖温の気が季節風によって日本海側に吹きつけ大雪が降るようになった。雪は落葉広葉樹林帯を豊かに蔽い，乾燥を防ぎ，渇水も防いだのである。此の落葉広葉樹林帯に中期以降縄文文化の日本列島における先進充実地帯が形成され，晩期には東北に集約される形で先進文化地帯が現出したのである。

落葉広葉樹林帯が植物性の食物に富むことは言を俟たない。堅果ナッツ類が豊富なことは人々の食物を豊かにすると共に小動物・鳥類をも養う。小動物や鳥は人々の動物性食物となる。この面では秋から冬にかけての鮭鱒の回帰や渡鳥の飛来なども重要な意味を持った。内陸部まで河川を遡上する大きな魚体の鮭などは暖地では望み得ない天恵である。同じ頃海岸には鰤が押しよせ，春が近づけば鰊が押しよせて来る。しかも雪は天然の冷蔵設備となり，塩蔵・乾燥・燻製などの作業を進めるのに時間的余裕を与えるのである。しかも積雪は冬季南西の照葉樹林帯でみられるような山火事の頻発を防止する。春になると積雪地帯では消雪線の低地から高地への順次移動に伴い，3月末から6月まで山菜を採取することができる。縄文人も好んだように現代東北人も山

菜愛好者が多いのは偶然ではあるまい。

縄文人も我々と同じホモサピエンスであるから，判断力は同じように発揮されたに違いない。住居近くに胡桃や栗も植えたであろうし，自然薯も植えたであろう。兎や川魚は飼育をしていたかもしれない。豆類も次第に作られるようになったし，亀ヶ岡文化の頃には蕎麦も栽培されていた。食糧獲得に終日を費す必要がないとすれば，余剰の時間が多くなる。専門の工人も現れることになる。亀ヶ岡式土器のあの精密な技法や，同時期の木製器具の工法などを見るならば，素人細工ではないことがわかる。限定的ではあったにしても食物獲得を生業とする大方の人々のほかに軽度の手工業者も派生してきていたのであろう。

要するに縄文時代数千年に亘って充実した生活をし，津軽・宗谷・間宮という対岸を望み見ることのできる安全な海峡を渡る対北方交流のみちが通じていた東北の住民は，この伝統の先進性に対しはっきりした自負自信を持っていたに違いない。そこに稲作が伝わってきた。もちろん適地には受容されやがて定着したところもあろう。だが一般にはこの南方性植物の稲が東北の北部や高地には栽培上の限界があり，やませ地帯などでは冷害で種籾も保てないような厳しい状況であったに違いない。おそらく稲作伝来後数百年たってもこの基本的状況は変わらなかったに違いない。そのようであるならば，長い伝統を持ち従来の馴染深い安定的食糧収得手段を持ち続けようとする反骨精神の表出がみられることは至って自然のことである。

古代になっても，東北の人々の間には父祖から伝えられていた過去の先進性についての栄光感が漂っていたものと認められる。不安定な新規のものを敢て積極的に求め受け容れず，永い伝統性を持ち定着していた旧来のものを守ろうとする風土性が厳存したものと考えられるのである。これが三十数年前に私が古代東北史と初めて対面した時強く印象づけられた「東北のこころ」「東北の性格」を形成した根本的な原因であったことが明らかになる。重厚な守旧性が東北には存在したのである。

この古代の風土性と人々の性格とは江戸時代になっても変わっていなかった。先に引いた『東遊雑記』の中で古松軒は，出羽国の大館の辺で「生まれながらの鈍才愚物の百姓が，米の豊かさにまかせて平生遊び暮らして済ませているので，みんな鈍に思われる」旨の記述をしている。一千年も経って東北でも米作は定着していた。殊に秋田・宮城・庄内などの地方は近世にはもう豊かな米作農業の地帯であった。この段階では馴染んだ稲作の上に安住していたのであり，古松軒の「鈍重」と感ずるものが存在したのである。

古代において積極的に南西からの新たなものを取り入れようとはしなかった東北の文化的行動様式は，農業が定着したのちの近世・近代の生産体制の中では，近代までは鉱産や林産の側面効果もあって，それなりの安定を得ていたといえる。しかし現代においては，特に第２次大戦後の戦後状態から脱却した産業構造の変化の中においても，なお近世・近代的状態の上に安住してまではいないにしても，なおこれを守り，これにこだわるという形の理念を持ち行動様式をとることになり易いのである。また，方言による言論発表様式なども，東北人を素朴魯鈍の如く視せる素因となっていて，そこに形成されている文化をも低劣古拙と位置づけられる傾向を招くのである。

東北の天地は広大で，そこには反骨精神で守られた未開発の自然が保たれ，緑が豊かで住む人は少ない。他地方に比べ，殊に都市圏に比べてこの特質は顕著である。しかも観光資源などとしてはそれが他に対する比較価値とされている。だがこの未開発性は，開発至上主義的な高度経済成長期においては，第２次産業の進展する社会において，未熟低価値でしかない。東北の風土は未開発という基軸を挟んで裏返しに位置づけられ，反対に評価される宿命を持っているといえる。

しかし環境問題が地球規模で，更には宇宙規模で人類の課題となっている現在，残された未開発の自然は，稀有で最高の絶対価値たり得る。そしてこの東北文化の特性と自然条件とはその歴史的風土性によって形成され保たれて来たものであり，これを主体として担って来た東北人のこころの底にあるものは，遠く原始時代に淵源があって，古代において形成されたものであるとする管見を述べ，人爲最新の優秀価値を創造固成される土木工学の権威の方々の前での，門外漢の話をここで終わらせて頂き，御清

聴に感謝する次第である。

〈参考文献〉

1）新野直吉『多賀城と秋田城』
（東北出版・S34）
2）新野直吉『古代の国々出羽の国』
（学生社・S48）
3）伊東信雄『古代東北発掘』
（学生社・S48）
4）新野直吉『古代東北史の人々』
（吉川弘文館・S53）
5）新野直吉『秋田の歴史』
（秋田魁新報社・S56）
6）新野直吉『古代東北史の基本的研究』
（角川書店・S61）
7）新野直吉『古代東北日本の謎』
（大和書房・S63）
8）新野直吉『古代東北の兵乱』
（吉川弘文館・H1）

＊文博　秋田大学教育学部長